

主体/主調はいかにして確立されるのか？～主調と主体の相同性について

ジャック・ラカンの論理的時間

3人の囚人が看守から呼ばれ、次のように言われる。「これからお前たちの1人に自由を与えよう。ただし条件がある。ここに5枚のゼッケンがある。そのうち3枚は白、2枚は黒だ。この中から3枚を選んで、1枚ずつお前たちの背中に貼る。ここにはもちろん鏡はないし、またお互いに話をする事も許されない。いち早く自分の背中のゼッケンの色を言い当てたものを釈放する。ただし自らの結論について、論理的に説明ができなければならない。それでは諸君の幸運を祈る。」こう告げてから、看守は3人にそれぞれ白いゼッケンを貼り付けた。3人はいつか考えたあとで、いっしょにためらいがちに二三步前進し、そして今度は一気に同時に看守のもとに駆けつけた。3人が3人とも論理的な説明を行えたので、全員が釈放され自由の身となった。

解決のための前提

一般的な論理問題には時間軸は排除されているが、ここでは時間軸を導入することが必要不可欠である。ちょうど音楽が成立するためには時間が必要不可欠なように……。

そしてもう一つ、音楽といっても、中世・ルネッサンスの多声（ポリフォニー）音楽ではなく、モーツァルトやジャニーズ、AKB 48などの調的和声音楽をイメージすること。つまりこの論理問題を解決するには、〈転調〉しなければならない。

繰り返せば、この問題を解くカギは、（判断を下すのに最低限必要な）〈時間〉と〈転調〉である。

モーツァルト『コシ・ファン・トゥッテ（女みんなこうしたもの）』からフィオルディリージとフェルランドの二重唱（第29番）

この曲は以下の転調をとおして、主調（A Dur）を確立する。

A-Dur → E-Dur → C-Dur → a-moll → A-Dur

フェルランドのアリア（第17番）A-Dur：「いとしい人の愛のそよ風は僕に甘い慰めを与えてくれる、愛に満ちた心があればあとはなにも要らない」

フィオルディリージのロンド（第25番）E-Dur：「愛しいあなた、許してください、この愛する心の過ちを」

二種類の私：存在する私と「私は白である」と判断する私（＝主体／主語としての私）

組合せとして考えられるのは、次の3通りのみ。

① ○●●●

② ○○●●

③ ○○○○

1. もし仮に 2 つの黒を目にするとすれば、ひとはみずからが白であることを知るだろう。(最初の〈転調〉)

みずからの存在を判断するためには、まず「2 つの黒をみる」という前提の上に立つこと。ラカンはこの一連の論理的な進行を、調的和声システムになぞらえて、「時間の転調」と呼んでいる。

2. もし仮にわたしが黒であるとすれば、自分が見ている白の 2 人はいずれ遠からずお互いが白であると知るだろう。(第二の〈転調〉)

〈私〉がかりに黒だとしたら、他の 2 人はどちらもつぎのように考えるに違いない。「自分が何色かは分からないが、1 つの白と 1 つの黒がわたしには見える。もしわたしが黒であれば、白は 2 つの黒を見ていることになるのですぐ走り出すはずだ。しかし白に動く気配はない。そうだとすればわたしは白なのだ。すぐに走り出さなければ……」。白の 2 人も〈私〉と同じようにみずからが黒であるという前提にとりあえず立つことで、彼らもまた論理的な進行の最初の契機(「2 つの黒を見るなら、ひとは白であることを知る」)を捉えるはずだ。もちろん 2 人のうちのどちらかがすぐに走り出すことはあり得ないことを(2 人の白を目にしている)〈私〉は知っている。けれども彼らのどちらも 1 つの白と 1 つの黒を見ているとすれば、この白の 2 人は双方が動かないことから、自分たちは白であるとやがて知るだろう。

〈私〉が黒へと転調することによって、〈私〉は白の 2 人が相互に相手を媒介することで、いずれもみずからを白であると判断するに至る経緯を明らかにすることができる。〈私〉が黒であるという前提の上に立つときのみ、彼らがお互いをどう判断するかを〈私〉が判断する第 2 の契機が〈私〉に与えられる。これが第二の〈転調〉である。

3. わたしがこのように考察しているこれらの白が、わたしに先駆けて彼らがそのことに気づかぬうちに、わたしは白であることを急いで断言しよう。(第三の〈転調〉)

〈私〉が黒であれば、白の 2 人が自分たちの色を知ることになるのは時間の問題。なのにこの 2 人に走り出す気配は相変わらずない(のを〈私〉は見る)。2 人がいまだに走り出さないとすれば、それはじつは〈私〉はそもそも黒ではなくて、白なのだということになる。この最後の契機における転調によって、この「論理的時間」の主体/主調が確立される。つまり、〈私〉は自分が白として存在していることを〈私〉が断言することによって、〈私〉はみずからを白として主体化するわけである。

そして自分が白であるという〈私〉の判断が正しい判断であるためには、他の 2 人に遅れを取らないように走り出すという判断が最終的になされなければならない。

みずからの存在についての〈私〉の判断を、他の 2 人の判断を判断することによって〈私〉が判断するとき、〈私〉という存在は対象 a という黄金比率として現れるはずである。みずからの存在についての正しい判断によって、遡行的に〈私〉という存在が見いだされる。

かりに〈私〉がもしも他の 2 人に遅れを取って、所長に自分は黒であると断言するとしたらどうだろう。〈私〉が「論理的時間」を逆行して、〈私〉は黒なので、白である 2 人は

〈私〉に先駆けて走り出したと考えるとしたら。そこでは〈私〉という存在が〈私〉の判断を支える唯一の実体的な根拠となってる。そしてその判断が論理的 logical ではなくて、パトローギッシュ pathological であるとしたら……。

課題：ラカンの「論理的時間」について、以下のスラヴォイ・ジジェクの文章に基づいて、分析を試みなさい。

Freud uses three distinct terms for the agency that propels the subject to act ethically: he speaks of ideal ego (*Idealich*), ego-ideal (*Ich-Ideal*) and superego (*Ueberich*). He tends to identify these three terms: he often uses the expression *Ichideal oder Idealich* (Ego-Ideal or ideal ego), and the title of the chapter III of his booklet *The Ego and the Id* is “Ego and Superego (Ego-Ideal)”. Lacan introduces a precise distinction between these three terms: the “ideal ego” stands for the idealized self-image of the subject (the way I would like to be, I would like others to see me); the Ego-Ideal is the agency whose gaze I try to impress with my ego image, the big Other who watches over me and propels me to give my best, the ideal I try to follow and actualize; and the superego is this same agency in its revengeful, sadistic, punishing, aspect. The underlying structuring principle of these three terms is clearly Lacan’s triad Imaginary-Symbolic-Real: ideal ego is imaginary, what Lacan calls the “small other,” the idealized double-image of my ego; Ego-Ideal is symbolic, the point of my symbolic identification, the point in the big Other from which I observe (and judge) myself; superego is real, the cruel and insatiable agency which bombards me with impossible demands and which mocks my failed attempts to meet them, the agency in the eyes of which I am all the more guilty, the more I try to suppress my “sinful” strivings and meet its demands. The old cynical Stalinist motto about the accused at the show trials who professed their innocence (“the more they are innocent, the more they deserve to be shot”) is superego at its purest.

Slavoj Zizek: Ego Ideal and the Superego

<http://www.lacan.com/essays/?p=182>